

---

# 宵闇の王

神月きのこ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

「PDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

宵闇の王

### 【著者名】

神月きのこ

N8539D

### 【あらすじ】

世界を統べる王がいた。彼に自由にならないものは何もない。金も女も、人の運命さえも。しかし、彼が満足することはない。

春工ロス2008参加作品

## 円を求めて（前書き）

この小説は春エロス2008参加作品です。

\* 春エロス2008とは、18禁にならない程度の、ギリギリエロスを目指す企画です。

春エロスで検索すると、他の作者様の小説が読めます。

### \* 注意

性表現、暴力表現が頻繁に登場します。  
それでもいいという方のみ、ご覧ください。

## 円を求めて

退屈している女が娛樂を求めるよつし。

闇の中で男が光を求めるよつし。

それは当然の成り行きだつた。

月明かりすら届かない、闇の支配する室内に響く湿つた音。  
そして混ざり合う女の声。

甘い嬌声はいまや掠れた悲鳴と成り果てている。

狂つたように鳴く女を、八雲は冷めた目で見据えていた。

「……つまりんな」

小さな咳きであったが、組み敷かれている女は過敏にその言葉に  
反応する。

身を固く強張らせ、たつた今まで快樂に上氣していた頬は急速に  
青ざめていった。

「いいことを教えてやるつ。明晚、女が1人来ることになつてゐる  
耳元で囁くと、女の口から短い悲鳴が漏れ出た。

それは先程までとは明らかに違い、恐怖ゆえのこと。

「先日町に來た踊り子がかなりの美女という話でな」

耳を食み女を突き上げながら続ける。しかし、既に女は行為に意  
識を向けることができなくなつていて。

「お前はどうしたい?」

八雲の声が甘く響く。優しい響きを帯びてはいるが、女には却つ

て逆効果のようで、涙をボロボロと溢れ出せる。

「い、いや……嫌あああつ」

「とはいえ、お前もそれなりに長く忍んでくれた」

急に八雲の声音が変わる。

泣き叫ぶ女は、その淡々とした声に、ピタリと押し黙る。しかし、興奮状態の為に呼吸は荒い。

己の運命を握る男の次の言葉を震えながら待っていた。

「奴隸どもにくれてやろうつかとも思ったが、お前をあまり苦しめるのも忍びない」

奴隸たちの性欲の捌け口となるか彼らの餌となるか、それが本来八雲に見放された女が辿る道である。

しかし、八雲の言葉からは、そのどちらでもないことが窺い知れた。

見開かれた女の瞳に、希望の色が宿る。

「だから……この場で楽に殺してやろう」

しかし、一瞬にして女の儚い期待は打ち碎かれた。絶望に女の顔が歪む。

その変化に八雲の口元が楽しそうに笑みを描いた。

女の首元に指を這わせながら、強く腰を突き入れる。柔らかに女の首筋を撫ぜながら、律動を繰り返した。

女は恐怖と絶望に顔面を染め、しどね脣に腕をついて後ずさるうつともがく。だが、体格のいい男に組み敷かれ、首を押さえつけられては逃れられるはずもない。

八雲が指先に力を込めた。

鈍い音が八雲の手に伝わる。

声を上げることもなく、女は痙攣を繰り返す。口からは血と涎の交じり合った液体が頬を伝い耳元に落ちる。

脣に子種を注がれながら、女は絶命していた。

女から身体を離すハ雲の顔には何の感概も浮かんでいない。己の衣服を整えると、彼は女に一瞥もくれることなく部屋を後にした。

「片付けておけ」

厚い雨雲を思わせる灰色の髪をかき上げ、待機していた側仕えに言いつける。

苛立たしげに命じられるのにも顔色一つ変えず、側仕えは一礼し部屋の中へと入つていった。

その姿を最後まで見届けることなく、ハ雲は自室に向かい歩を進める。

ハ雲は退屈していた。

一つの世界を丸ごと統べる王でありながら、満たされることのない空虚感を感じ続けている。

彼の思い通りにならないことなど何もない。

望めば何でも手に入る。金でも宝石でも、女さえも。人の運命ですら、彼の掌中に握られている。

それなのに一体何が足りないのだろう。何をすれば、この渴きは癒されるのだ。

ハ雲は窓の外を見上げながら、溜息をつく。

細い月が、雲の隙間から朧気に顔を覗かせていた。

昼間だというのに、謁見の間に差し込む光は弱弱しい。

窓の外には薄い雲が広がつており、その為広間は薄暗かつた。

その中を、一人の女が玉座の前に引き連れられてきた。  
女の腰まである長い髪は、弱い明かりでありながらも光を反射して輝いている。

「お初にお目にかかります。八雲様」

跪ぐ女の凛とした声に、八雲は片眉を上げた。

彼女は、王への献上品としてこの場にいる。残虐なる支配者への、だ。

だといふのに、この落ち着き具合はどうしたことであろう。並の女ならばどれ程取り繕つても声の震えを抑え切れないといふのに。「顔を上げる。女、名前をなんと言つ?」

促すと、長い髪に隠された女の容貌が露になる。  
白い肌に紅の唇が際立つ。

「アカツキ明月と、申します」

長い睫毛に縁取られた瞳は氷の色に似た青、ほんのりと色づいた頬。

踊り子であるといつだけあり、確かに細い体は均整が取れている。  
思わず八雲は息を呑む。  
しかしそれは、女の容姿によるものではない。  
今まで見たことのないほど力強い瞳に、八雲は射抜かれていたのだ。

どれだけじつと女の瞳を見ていたらうか。八雲は上機嫌に目を細めると、玉座から下り明月に歩み寄つた。

跪いたまま己を見上げる明月の顎に手をかけ、視線を合わせる。「明月。これより先、お前は私の為だけに踊ることになる。その覚悟はあるか」

「……覚悟ならば、してまいりました」

静かな声には、それでも張りがあり、耳に心地良い。

間近に見る明月の瞳は、より透明度が増しているように感じられた。八雲の鋭い目に見つめられて尚、彼女の目は揺るがない。

「決して私は貴方様のものにはならない、と」

決然と言い放つ。

さほど大きくはないはずの明月の声が、広く響き渡る。

「己の女……！」

明月の隣に控えていた男がいきり立つ。彼女を連れてきただけに、どのような責を負わされるかと思うと明月の発言を見過し<sup>1</sup>せなかつたのだ。

「黙れ、今は私が明月と話をしているところだ」

焦りから顔を真っ赤に染め上げる男を一睨みして黙らせる。

八雲は己と明月だけを広間に残し、他の者たちに退室するように命じた。これより先も、邪魔が入るに違ないと予想できたからである。

側近まで全員下がらせると、八雲は明月と視線を合わせた。

「ならばどうする。私を殺すか」

「残念ながら、私にはそのような力はございません」

「己の場で自害でもするつもりか」

返事は鈴を転がすような笑い声だった。

「そのようなことをする理由がどこにありますよ」

八雲には女の言わんとすることが分からなかつた。

現在、事実として明月は己の場にいる。逃げ出せるはずのない王

宮に。

「貴方様が手に入れられぬものなど、ないでしよう。そう、事実、貴方様は私を手にお入れになりました」

不可解な思いが表情に出ていたのだろう。明月は滑らかに語りだした。

しかし、彼女の言葉は更なる疑問を八雲に与える。

「先程の言葉と矛盾しているのではないか」

「いいえ」

八雲の問いに、明月はきっぱりと反論する。

「私のこの身は全て貴方様の自由に。頭のてっぺんから爪の先まで、髪の一筋さえも貴方様の望みのままに。ですが」

そこで一度、明月は言葉を区切る。

瞬きの後、彼女は鋭く八雲を見据えた。

「貴方様は決して、私を手に入れることはできません」

「……」  
「……」  
「……」

暫しの沈黙。それを破つたのは、八雲の笑い声であった。

クツクツと、決して大きな声ではなく、しかし確かに喉を振るわせる。

「お気に障つたのでしたらどうぞ、処分を」

「いいや、気に入つた」

捕えていた明月の顎から、頬へと手を滑らせる。

「面白い。是が非でも私のものにしてやる」

それは、当然の成り行きだった。

「お前の言う、手に入れられないというのがどうこうことなのか。

私には分からぬ

八雲は飽き飽きしていたのだ。

自由にならないことのない、この世界に。

「だが

それならば。

「すぐに、つい直指したこと後悔させてやる」

手に入らないものに強く惹かれるのも、必然だったのだろう。退屈という闇の中で、八雲は光を見つけたような気がしていた。

## 円を求めて（後書き）

お読みくださいありがとうございました。  
今のところ全3話、次回は3／20に投稿予定です。  
(話数、日付  
共に前後する可能性があります)

## 印を捕えて（前書き）

申し訳ありません！

更新時に、本来の冒頭部分を掲載し忘れていました。  
普段メモ帳で書き、それをはりつけているのですが、冒頭を間違えたようです。

そして今まで気付かず…読んでくださっていた方、本当に失礼致しました。

## 円を捕えて

わらわの火が壁に陰影を刻む。

わらわと炎が揺らぐに合わせて踊る影から、ハ雲は視線を腕の中の女へと移した。

淡い光に晒される白い肌は、未だ情事の火照りを残している。

「明月」

呼びかけると、背後から抱き締められていた女が振り返った。

「私は明日から一週間ほど留守にする」

「はい。お気をつけていってらっしゃいませ」

ハ雲が城を空けるとなると、それは公務に他ならない。

その為、特に疑問を投げかけることもなく、明月は返事をした。  
勿論一週間公務だけを続けるとも考えていないであろうが。

「寂しいか？」

問うと、明月は微笑んだ。真っ直ぐな瞳が悪戯っぽく細められる。

「寂しいです、と答えればよろしいのでしょうか？」

実際にはそんなこと思つてもいい、とでも言わんばかりの口調。ハ雲は苦笑するしかない。

「口の減らない奴だ」

「それは失礼を。正直者なものですから」

明月は不敵な笑顔そのままに、素つ気無い言葉を紡ぐ。

その明月の額に一つ口付けを落とし、ハ雲は小さく息をついた。

次いでハ雲の顔に浮かぶのは、口の端を釣り上げるだけの意地の悪い笑み。

「そう言いながらも、こちらの方は一週間待てるのか？」

未だ情事の跡の色濃く残る秘部へと指を伸ばす。指先が湿った秘所へと割り込むと、明月はビクリと身を強張らせた。

「ハ雲様と一緒にしないでくださいませ」

「そうだな。一週間後は覚悟しているといい

息が上がるのを必死に抑えながらも、明月は不敵な笑みを崩さない。

「貴方様は一週間禁欲など、なさるつもりもないでしょ？」

「妬いているか？」

「いいえ、全く」

言葉の最後に、布が肌と擦れる音が重なった。

明月がハ雲の元に来てから一ヶ月。その間二人は三日と間を置かず肌を重ねている。

勿論いつも求めるのはハ雲であり、互いに望んでのことではない。しかし明月は始めて宣告した通り、ハ雲が望めばいつでもその身を差し出した。

己の身は全てハ雲の自由である。そう告げた言葉を、明月は違えなかつた。

そして逆に、明月はハ雲にすがることも、何かを望むこともしていない。

明月の言つハ雲のものにはならないといつのは、このことを指すのだろう。そうハ雲は推測していた。

ならば、明月を己にすがらせることが出来れば、彼女の全てを手に入れたことになるはずである。

明月はハ雲に気を許していない。だから、すがらない。

それは理解できる。

だが、ハ雲と過ごしている時の明月は軽口も叩けば笑顔も見せる。無理して気を張っているようでは思えなかつた。

どうすれば明月を口のものにできるのか。ハ雲には見当もつかない。

しかし、そのことは決して不快ではなかつた。明月と共に過ごす時間は、ハ雲が今まで得ることのなかつた充足感に満ちていたのだから。

一週間の出張公務を終えて、ハ雲は己の城に帰つてきた。早速とばかりに明月の部屋を訪ねるが、彼女の姿は見えない。窓から差し込む柔らかな日差しが、簡素な部屋の中を照らしているだけだつた。

その場に、主の帰還を聞きつけた配下の一人がやつてきた。

「明月はどうだ？」

彼の挨拶を聞くのもせこに、ハ雲はまだ若い配下の青年に問う。

青年は暫し考えるように首を傾げた。

「明月殿は、この時間でしたら中庭にいるのではないかと思ひます」「中庭？」

「はい。一日中部屋の中には氣詰まりだと仰つて、いつも毎間には中庭におられることが多いようです」

成程、明月は踊り子として各地を旅して回つていた。家の中に閉じこもるのは性分に合わないのかもしぬれない。納得しながら、青年にはそうか、とだけ答えておく。

「八雲様は、明月殿が随分お気に入りの」様子ですね」

「ああ、退屈しないからな」

応えると、青年の口の端が歪んだ。

何か言いたいことがあつたのだろう。

だが、余計なことは言わない方がいい。そう思つてか口を閉ざして笑みを形作る。

それもよくあることと、八雲は気に留めることもなく中庭へと足を向けた。

光の集まる中庭は、この城の中で最も艶やかに四季を感じる」とが出来る場所である。

中央には桜の木が一本、主役然として居座つている。

その桜の木の下に、明月は立つていて。明るい日差しを受け、長い髪がみずみずしく輝いている。

声をかけようと数歩近付き、八雲はそこで明月の傍らに立つ一人の男に気がついた。

足を止めて、その男を見やる。

線の細い男だ。否、線が細いどころか貧弱と言つて差し支えない。顔立ちにはこれといって特徴が見受けられない。

薄汚れた服をまとつて髪も全く手入れされていないことが、更に男の印象を凡庸としたものにしていた。

城の敷地内でそのような格好をしている者、となれば間違いなく奴隸として連れてこられた人間だろう。

草木の手入れをしていたのだとすれば、この場に彼がいること自

体はおかしくない。

おかしいとすれば、その奴隸と明月が親しげに会話をしていることである。

明月も物好きな、と八雲は始め呆れはしたものの、特に気に留めはしなかつた。

しかし。

明月の表情を見た途端、八雲は言い知れぬ苛立ちを感じた。彼女は笑っていた。と言つても、八雲といふときにも明月はよく笑う。

だが、今の笑顔は八雲の知るそれとは全く違つていた。切り取られた青空の下、晴天によく似合う健康的で邪気のない笑顔。

明月にもあのよつに少女のよつなあどけない一面があつたのかと八雲は驚嘆する。

そしてそれと同時に、八雲の中に広がる暗雲は濃さを増していく。明月の笑顔と反比例するかのように。

大股で歩み寄ると、明月が八雲に気付いて振り返った。

「八雲様。おかえりなさいま……っ」

手首を掴み上げ、引き寄せる。その力の強さに明月が顔を顰めたが、八雲は構わず彼女を引っ張つて歩く。

「八雲様？」

城の中へと入つてからも、廊下を早足に歩き続ける。その八雲に大人しく従いながら、明月は困惑したように八雲の名を呼んだ。

「私は今日帰ると言つておいたはずだ」

低い声が明月の耳を打つ。

「主の帰宅を、何故部屋で出迎えない」

「え、はあ。申し訳ありません、思つていたよりもお早いお帰りだ

つたものですから

「明月は、何故ハ雲がこのように不機嫌なのか分からぬようだつた。ハ雲自身、己の感情を理解できていないのだから無理もない。突然湧き上がってきた激情に、名前を付けることができなかつた。唯一つ理解できるのは、己の中の凶悪な願望が目を覚ましたといふこと。それだけである。

明月の部屋に着くと、ハ雲は彼女を寝台に引き倒した。

半ば放り投げられるようにして寝台に倒され、明月は咄嗟に起き上がろうと腕を着く。

しかし、上半身を浮かせるよりも先に、ハ雲は明月の首を押さえつける。

「罰を与えないではならないな

」つ伏せに押さえつけられ、身動きの取れない明月に覆い被さると、ハ雲は彼女の耳に唇を寄せ囁いた。

## 円を捕えて（後書き）

春工ロス参加作品2話目です。

この下に春工ロスのサイトへのリンクを貼っていますので、そちらも是非ご覧になつてください。

他の参加作者様たちの素敵なお小説も読めます。

そして、3話では終わらないということに気がつきました。

次回更新日は決まっておりませんが、できるだけ早くします。

## 円を縛りて（前書き）

序盤からえつちい描写が入ります。  
ご注意ください。

## 月を縛りて

未だ夕暮れと呼ぶにも早い時間。高く明るい日は、くつきりと房事を照らし出す。

抱えあげられた明月の太腿は、体液に濡れ光を反射していた。それを掬い取るように指を這わせると、腰紐で明月の手首と繋がっている寝台が軋む音を立てる。

明月が身を引こうとするのを、その音が即座に伝えていた。

八雲は明月の首に手を伸ばして彼女の身体を押さえつける。苦しげに明月の表情が歪み、喉からは細く空気が漏れた。

「逃げられると思うな」

低い八雲の声は獣の唸り声のように、明月を威嚇する。

何かを言おうと明月の唇が動いたが、喉から漏れるのは掠れた吐息のみ。明確な音を形成することはなかつた。

八雲が首から手を離すと、急に肺に侵入してくる大量の空氣に明月が咽る。首筋には赤く跡が刻まれる。

そこに唇を寄せ、胸を驚掴みにする。柔肌に歯型がつくほど強く歯を立てる。

明月の小さな悲鳴が聞こえたが、それに構わず更に力を入れると口の中に鉄の味が広がつた。

ゆるやかに舌で舐め取ると組み敷いた体が震える。

形の良い胸は八雲の手の中で柔らかく歪んでいた。

明月の中に強引に押し入る。勢いそのままに壁を擦り上げ蹂躪した。

手荒な行為に、明月は唇を噛み締めて耐えている。

きつく瞑られた目と寄せられた眉、痛みに涙を流しながらじっと堪えるその姿に、八雲はかつてないほど情欲を煽られていた。

薄暗い部屋は、如実に時間の変化を表していた。

暗がりに浮かび上がる明月の滑らかな肌には、いたる所に乾いた血がこびりつき、首や手首に赤い痣がくつきりと浮かぶ。

「怒っているのか」

明月は先ほどからぐつたりとうつ伏せに横になつたまま、顔を上げようともしない。寝ているわけではないというのは、息遣いから察せられた。

長い髪に指を絡ませながら問うと、明月は顔だけを八雲に向ける。赤く腫れた目が八雲をじっと見た。

「いいえ」

弱弱しく掠れた声で、しかしほつきつと答える。

「申し上げたはずです。私のこの体は、全て貴方様の自由であると

その返答に、八雲は自嘲氣味に笑つた。

「私には、怒るのも勿体無いということか」

明月の瞳が柔らかく細められる。口の両端を釣り上げて笑みを作る。

言葉にされずとも肯定の意がはつきりと伝わってくる。

「ご存知ですか、八雲様」

ゆつくつと、明月は身を起こした。薄い毛布を胸元に引き寄せる。

「怒りが、どれほど強い感情であるのか

再び八雲へと向き直る。

「怒り、恨み、憎しみ……そのような感情は、簡単に心を支配してしまいます。その対象のことしか考えられなくなるほど」

明月は傷の塞がりきつていない首筋に手を伸ばす。乾いた血がほつそりとした指先に付着した。

「ですから、私は決して貴方様を憎むことも、恨むことも致しません」

それだけ強い感情なら簡単に抑えられるものではない。そう言おうとしたが、八雲は明月の目を見て開きかけた口を閉ざした。

自信に満ちた明月の瞳に、一切の疑問は封じ込められてしまつた。

明月の認識が甘いということは決してない。

彼女は八雲の性格を、残虐な行為を行うことに一切のためらいがないことを知つてゐる。

それを分かつた上で彼女は八雲が何をしようとも決して怒りはないし、止めようともしないのだ。

仮に足を切り落とし、どこへも行けないようになつて、踊れないようになつても。

明月が氣を許した相手を、ことごとく殺したとしても。

八雲は明月から目をそらすと、溜息をついた。

苛立ちは既に鳴りを潜め、代わりに倦怠感が身体を埋め尽くしている。

ハ雲は上着を羽織ると寝台から降りた。

「また来る」

短く言い置いて、ハ雲は部屋から出て行った。

扉に彼の姿が遮られ、明月が深く安堵の溜息をついたことを、ハ雲は当然知らない。

そして、それから数日の後。

ハ雲はまた、部屋にいない明月を探して中庭へと訪れていた。

「またここにいたのか」

桜の木の側に座る明月を見つけ、ハ雲の声に微かに安堵の響きが混じる。

明月に乱暴を働いて以来、変わったことが二つある。

一つは、明月が部屋にいないことが多くなった。

そんな時、大概は中庭に行けば明月は見つかる。だが、中庭にいなかつた時は彼女が帰つてくるまで見つけられないのが常であった。誰に聞いても、その間明月がどこにいたのかは分からぬ。明月に問つたところで、城内を散歩していただけとしか言わない。

今日は中庭にいてくれた、それだけのことで安心してしまつて、いる自身を、ハ雲は認めざるを得なかつた。

「こつも、じんなところで座つていて飽きないか」

「どうせどこにいても同じようにただ呆けているだけなのですから、部屋の中よつ大分マシです」

春の風が柔らかく明月の髪を撫ぜていく。

空は薄い雲に覆われているものの、空氣せたりと乾いて暖かかつた。

「暇か」

「ええ、かなり」

淡々と、素つ氣無むれ感じの口調で明月は八雲に応じる。

これが、もう一つの変化。

明月は以前に比べて、笑わなくなつた。

今までは皮肉を言いながらも微笑むことがよくあつたといつて、ここ数日それが殆んどない。

「ならば、もう少し足繁く通つことにするか」

「もう少しも何も、八雲様は異常なほど足繁く通つてくださつてますか」

あくまで口調は淡々としている。

拒絶の素振りなど、全く見せていない。

だといつのに、それくらいならば暇である方がよっぽどこいという明月の意思が伝わつてくるように八雲は感じた。

八雲は間違ひなく、失敗をしたのだろう。

明月を手に入れるといつ試合を進めて行くうえで、致命的な失敗を。

何か挽回の手立てはないものか。

思案しながら、八雲は白い空を見上げた。

## 円を縛りて（後書き）

遅くなつてすみません。

次回最終話予定です。

早ければ明日、遅くとも来週には更新します。

## 月を抱きて

明月が子を身にもつたのは、それから数ヶ月の後であった。

ここ数ヶ月、ハ雲と明月の関係は後退するばかり。遠のいていく距離をどうしたら埋めることが出来るのか、ハ雲はその術が分からないままでいる。

いつからか、ハ雲は明月と話すことが苦痛になつていつた。手に入らないことを楽しんでいたはずなのに、今は手に入らないことがもどかしくてたまらない。

自然と明月を訪ねる回数も減つていた。

そんな時に明月が妊娠したというのだから、子のできる時機とうのは不可解なものだ。

何はどうあれ、そのことを知ったハ雲は喜んだ。否、負けの確定した勝負に希望を見出したと言つた方が正しいかもしない。

これで、明月との関係がいい方向に変化するのではないか。そんな期待を抱く。

母親とは子に情が湧くもの。子を愛しく思いながら、その父親を敢えて拒絶するようなこともしないだろう。

流石にあからさまにはしゃぐような真似はしなかつたが、ハ雲は確かに浮かれていたのである。

だが、その感情に迷いが生じるまで、そう長くはからなかつた。

明月は寝台の上に腰掛けて窓の外を眺めていた。

ハ雲が部屋に入つてきても、振り返りはしない。気付いてすらいのだから、当然である。

「明月」

声をかけると、ようやく明月が振り返り、八雲を見上げた。薄氷色の瞳に八雲の姿を映すと、明月は緩く首をかしげる。

「少し様子を見に来ただけだ」

隣に座り、明月の細い肩を引き寄せる。

「……暫くで、明月は見ただけで分かる程に痩せてしまっている。

通常は子供ができればふくよかになるものだというのに、明月はその反対に細く、小さくなつていく。

元から細身ではあつたものの、今では壊れてしまいそうなほどに華奢になつていた。

「食事はしつかり摂つているのか」

「はい」

明月の返答は短い。

「……十分な睡眠をとつているか」

「ええ。……どうしたんですか、いきなり」

突然の質問に、明月は不審に思つたようだ。八雲らしくないとおかしそうに笑う。

その瞳にはかつてのよつた力強さはなく、霧に覆われたかのよつに光は弱々しかつた。

「八雲様に心配されるのは、氣味が悪いです」

「私が心配しているのは、子供のほうだ」

そう八雲が応じた途端、明月から笑みが消えた。

困つたように手を伏せ、黙り込んでしまつ。膝の上で固く拳が握られていた。

「明月？」

瞳を覗き込むように視線を合わせようとすると、明月の唇が微かに動いた。

しかし、その唇が何か言葉を紡ぎだすことなく、すぐに結ばれ

てしまう。

「これ以上は、何かを言つても無駄なのだろう。ハ雲は溜息をつき、明月から離れた。

「私は仕事に戻るが、中庭にでも行つたりどうだ。気分転換にはなるだろう」

明月の様子がおかしいというのは分かつていて、

以前にはなかつた不安定さが色濃くなつてくれれば、誰でも分かる。だがハ雲はそれを、子を産むのにも不安があるのでどうと片付けていた。そうでも考えなければ納得できなかつたのだ。

ハ雲が部屋を出る直前、明月が何かを呴いたが、それがハ雲の耳に入ることはなかつた。

それは、許しを請う一つの言葉。

だが聞こえていたとして、ハ雲は気付くことが出来ただろうか。

明月の言葉の真意に。

そして、今後待ち受ける出来事に。

明月の子供が生まれたのは、長い冬がよつやく終わりを告げる頃であった。

夕方から急に冷え込み、雪の舞う夜に2つの生命が誕生した。

男女の双子である。

明月も子供も健康そのもの、その報告を聞きハ雲は一先ずほっと胸を撫で下ろした。

「お会いになられますか？」

立ち合つた医者の問いは歯切れが悪い。そのことを疑問に思いながらも、ハ雲は待望の子供と対面を果たした。

先に視界に入ったのは、男の方。こちらが弟なのだという。

まだふわふわとして生え揃っていない髪の毛は、明月と同じく月光に晒されたような青白色。うつすらと開かれた瞼の隙間から見える瞳も、明月と同じ色をしていた。

生まれたばかりな為まだ分からぬが、明月に似てゐるよつて思われた。

そして、もう一人姉の方は。

「……」

その姿を見た途端、八雲の時は確かに止まつた。

明月と似てゐる。それは恐らく、間違いない。

だが、問題があるのはその髪の色。

金に輝く産毛は、まだ色が薄く柔らかいから、などといつ問題ではない。

明月と八雲から、そのような色の髪の子供が生まれるはずがないのだ。

明月の青みの強い銀髪、八雲の闇を溶かしたような黒髪、どちらとも全く傾向の違う色なのだから。

「どういうことだ、これは！」

我に返つた八雲は、側に控えていた医者に怒鳴りつける。

しかし、聞かずとも理解は出来ていた。

生まれた子供は、八雲の子ではないのだ。

明月の態度が不自然になつたのも、心当たりがあつたからだろう。

八雲の脳裏に一人の男が浮かぶ。

以前に明月が中庭で話していた男。薄汚れてはいたものの、あの髪は日に透けるような金色ではなかつたか。

考えるよりも先に、八雲は歩き出していた。

目指す先は奴隸の宿舎。怒氣を振り撒いて歩く八雲に、誰も声をかけることができずにはいる。

ただ一人、配下の青年が八雲がやつてきた方へと歩を進めただけだつた。

中庭の横を通りがかつた時、八雲は一人の男が立ち尽くしているのを見つけた。

宵闇に紛れても色を失わない金の髪。

骨の浮き出た腕や足を、寒空の下に晒すことも厭わず、ただ立っている。

その視線の先にある場所は、明月の部屋。

瞬間、八雲の心に浮かび上がったのは明確な殺意。

暴れ狂う感情とは別に、八雲の表情は急速に色を失っていく。

次いで浮かぶのは狂氣。

「子供が気になるか」

中庭に出て、静かな声で問いかける。

男の薄い肩が、びくりと揺れた。

振り返る男の顔は、前髪に隠されて判別できない。

だが、それは確かに先日明月と話していたあの奴隸なのだと分かった。

細い肩を掴み、木の幹に押し付ける。男の口から小さく呻き声が漏れた。

「貴様の子のようだ。嬉しいか」

男が弾かれたように顔を上げたことにより、八雲は初めて男の顔立ちを知った。

痩せて頬がこけているものの、釣り目がちの、身形さえ整えていれば美男子と言つていい部類の顔である。

「俺、の？」

掠れた声から感情は読み取れない。  
喜色とも、戸惑いともつかない。

「心当たりはあるのだろう？」

言葉として外に出すたび、狂気にハ雲の口が歪んだ。  
そして、男が答えるよりも先に。

「ハ雲様……！」

明月の声が聞こえた。

男を押さえつけたまま振り返ると、明月が走つてくる。長襦袢だけを身に付けた格好から、どれだけ彼女が急いでいたのかが窺い知れる。

ハ雲が男の下へ向かつたことを、何者から聞きつけたのだろう。  
二人の間に割り込んだ明月は、そのまま崩れ落ちるように座り込む。

暗がりでもそうと分かる、血の氣の引いた青白い顔。  
命を産み落としたばかりの、まだ整わない体調で走つてくれれば無理もない。

「明月！」

慌てて抱き起しそうとしたのは、ハ雲ではなく男の方であつた。

「日高……」

弱弱しい声で、明月が男の名を呼ぶ。ハ雲が聞いたこともない、  
愛おしそうな声で。

これで確定だ。

言い訳のしようなどない。明月の相手はこんな奴隸の男なのだ。  
突きつけられた真実に、ハ雲は歯軋りをした。

「ハ雲様、お願ひします。彼を……彼を、殺さないでください。全て、私が悪いんです」

明月の声は、涙で不明瞭になっていた。

だというのに、ハ雲にはその言葉が大きく頭の中で響いたように感じられた。

お願いします、と何度も明月は繰り返す。

氷色の瞳は溶けてしまっているのではないかと思つまどじて、涙を溢れさせている。

ハ雲はずつと望み続けていた。

明月が己に縋ることを。

それが彼女がハ雲に気を許した証になると信じて、願つていた。だというのに、ようやく叶つた念願は、ハ雲に絶望しか与えなかつた。

目の前が真つ暗になる。

訪れた激昂は、ハ雲の理性を奪い去つていた。

明月の前髪を掴み上げ、顔を近づける。

「とんだ娼婦だな、貴様は」

ハ雲の意に反して、せせら笑つような声が響いた。

「私に抱かれながら、他の男にも体を許していたとはな」  
思つてもいられない言葉が出てくる。

そのようなことが言いたいわけではないのに、詰めるのを止められない。

「考へてもみれば当然か。気を許してもいない男に、その身を全て自由にさせられるような女なのだからな」

明月は、ただ黙つて聞いている。

弁解もしない。

「気付かなかつた私が間抜けだつたといふことか」  
自嘲的に八雲は笑う。

「罰ならば、私がどんなことでも受けます。ですから……」  
「明月、いいんだ、罰なら俺が……！」

明月を止めようとする男の言葉など、既に八雲の意識には入つてこない。

涙を流しながらも、真つ直ぐに八雲を見据える明月に目を奪われていた。

以前のよつた、八雲が惹かれた強い眼差しに。

「私の罪です。どのよつにでも、八雲様のお氣の済むままに」  
八雲は強く拳を握る。「己の掌に食い込む爪の痛みさえ感じないほどに、感情が昂ぶつっていた。

「ならば、私のものになるか」

できもしないくせに、と。八雲は続けられなかつた。

「承知いたしました

明月は、意外なほどにあつさりと「了承したのだ。

「馬鹿を言うな、できるわけ……」

「そう、確かに私の心は貴方様のものになることはできない」  
冷えて赤くなつた指先が、手近にある木の枝を拾つた。

「私の命も、私だけのもの」

「おい、何を……」

「ならば、貴方様のものにならない部分が消えてしまえば、私の全ては貴方様のものに」

八雲や男が止める間もなく、明月は枝の鋭い切つ先を、迷うことなく己の喉に突き立てた。

「 」

意味を成さない叫び声がこだまする。

それは一体誰のものであったのか。それすらも分からぬままに、絶叫は雪に飲み込まれていく。

明月が崩れるようにして倒れこむ。

うつすらと積もつた雪に、喉からとめどなく溢れる血液が染み込んでいく。

八雲も、男も。呆然と明月を見下ろしていた。

明月の行動が信じられず、ただ赤く染まつていぐ雪を眺める。

「なんだ、これは……」

自失の体で、八雲が呟く。

違う、こんなものは違う。

「はは、は……ははははは！」

こんなものは、手に入れたうちには入らない。

乾いた笑い声が空気を切り裂いた。

赤く染まつた雪は、穏やかに降り続ける雪と相まって花弁の絨毯のようだった。

その上に眠る明月は、憎らしげほどに美しい。

「逃げるのか……私のものにならないまま」

闇夜でようやく見つけた月は、隠れてしまった。

これから先、どうすればいい。

月を失つては、真の闇が待つてているだけではないか。

否、まだだ。まだ、なくしてはいない。

八雲の口が、歪んだ笑みの形を作る。

確かに、八雲は愛しい月を失つた。

しかし明月は、また新たな月を遺していくてくれたではないか。  
そう、まだ終わりではない。

「逃がすものか」

今度こそ、手に入れてみせる。

宵闇に王の笑い声が響いた。

## 仄を抱きて（後書き）

To be continued?

宵闇の王、これにて終幕でござります。

ここまで読んでくださった方、ありがとうございました！  
そして、投票してくださった方、感想をくださった方も本当にあつ  
がとうござります。

フレッシュナーを感じながらも、大変励みになりました。

あと、ブログの方でこれから暫く宵闇の王の裏話などを語つていこ  
うと思います。

現在明月の絵も公開中です。

興味を持たれた方は、是非おいでになつてください。

黒い鳥の眼

<http://sacriilege.blog.scarabobi.jp/>

それでは、ここまでお世話をありがとうございました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8539d/>

---

宵闇の王

2010年10月8日22時41分発行